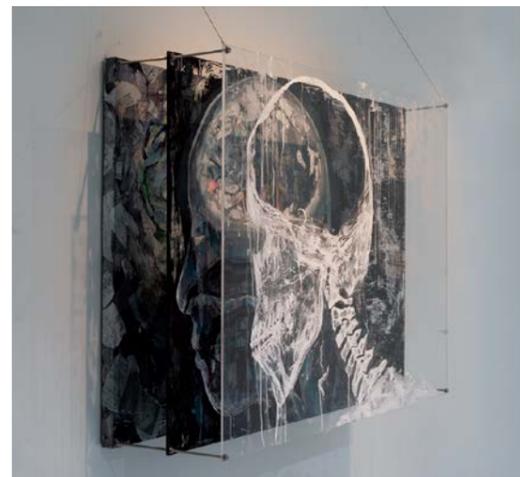


テーマ：「× (かける)」

2学期始めの2週間が制作期間です。
生徒一人ひとりが趣向を凝らし、
自分の表現を模索し、作品と向き合います。



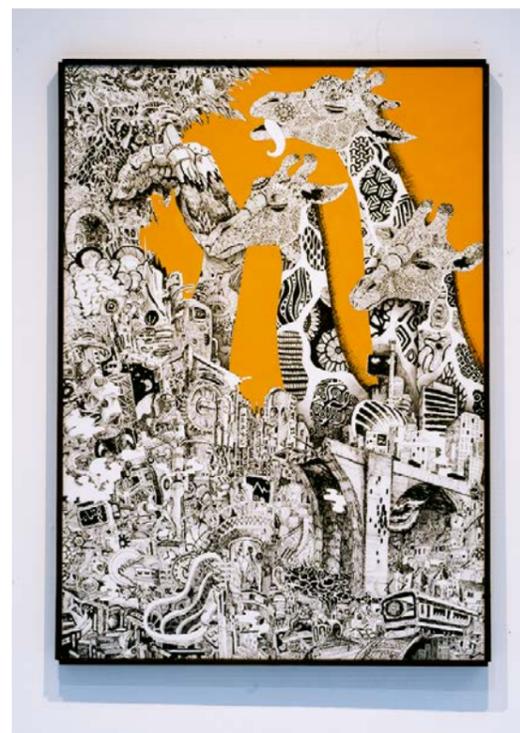
1 作品タイトル「形成」作者の今までの人生で記憶に残るイメージで構成し、自分×自分で日々更新されていく自分を表現しています。作品の額縁に施された彫刻も含めて作者が自分自身と作品に向き合う姿勢が伝わってきます。【70h・82.7×63cm・イメージ画】



3 作品タイトル「思考」2枚の亚克力板とパネルで構成された作品は、素材の層ごとに作者自身を構成する情報も層となり、重なり合います。一つひとつは平面でありながら奥行きを持ち、見る角度によってまったく違う見え方をする魅力的な作品です。【70h・幅72.8×奥行60×高さ51.5cm・空間表現】



2 作品タイトル「泡沫」床から天井を大胆に使い展示された迫力のある作品です。色の移り変わりが泡のように増え密集していく様は美しく、どこか儚さも感じます。一つひとつを見て色も混ざり方や合わせ方に変化があり見応えがあります。【70h・240×180cm・ポーリングアートなど】



4 作品タイトル「簇れ」細かく緻密に描かれた絵の中に作者のこだわりや趣味性が感じられる楽しい作品です。近未来を感じさせるような建物や機械の中にキリンが佇んでいる様が、どこか風刺的です。【70h・B2・ペン画】

大学生生活紹介

現在の制作活動の土台となっています。

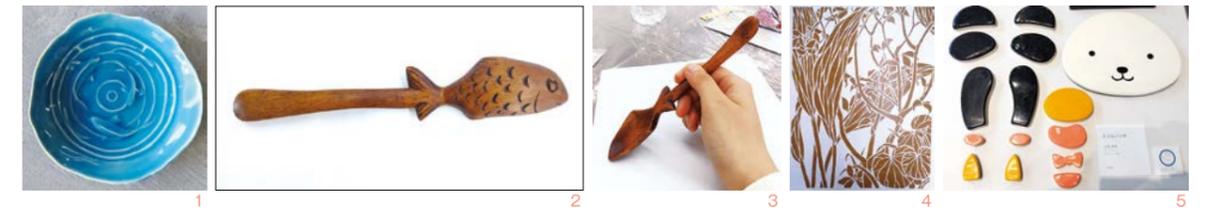
山田 実桜さん

京都市立芸術大学 工芸科陶磁器専攻2年
2021年度 京都市芸大専科 / 2022年度 京都市芸大本科
名城大学附属高校出身



志望校選びの時期は、何かものづくりをしたいけれど専門分野が漠然としていて決められませんでした。そのため、入学後に一通り体験してから好きな専攻を選ぶ京都市立芸術大学の工芸科を選択しました。本学では1年後期の工芸基礎という授業で漆工、染織、陶磁器をすべて体験したうえで好きな専攻を選ぶことができます。そこで最も自分の可能性を感じた陶磁器専攻に進みました。2年生になってからはまずは土を練るところから始め、電動ろくろで器をつくったり手びねりで40cmの球体をつくったりと基礎技術の習得をめざしています。

受験生時代は力及ばず一浪での合格となりましたが、一年間の浪人生活は確実に技術が向上して、現在の制作活動の土台となっています。さらに将来について考えさせられることも多く、今では浪人をして良かったと思えます。このときに培った力は今とても役に立っています。校舎は2023年にできたばかりで、京都駅から徒歩5分の立地で、生活もしやすく周辺地域へのアクセスも良いため、充実した学生生活を送れます。来年以降は授業課題だけでなく自由な作品制作にも取り組んでいきたいです。



1. 工芸基礎課題「魚の泳ぐ皿」タタラと石膏型を用いて成形
2. 3. 工芸基礎課題 木のブロックを彫り磨いた後、拭き漆で仕上げ
4. 工芸基礎課題 型染めをするための型 / 校内の植物をモチーフにカッターナイフで紋様を切り出し
5. 工芸基礎課題「たぶんパンダ」MDFをカシュー漆で塗装

OB・OGからのメッセージ

自分と、そして焼き物と向き合い続けた大学生生活

橋本 きおなさん 陶芸作家

京都市立芸術大学 美術研究科工芸専攻陶磁器細目修士課程修了
2016年度 京都市芸大平日専科 / 2017年度 京都市芸大本科
昭和高校出身



小さい頃から絵を描いたりものづくりをすることが大好きだったので、大学で芸術について学べたらどんなに幸せだろうと思い、美大受験への挑戦をはじめました。実技試験対策のために河合塾に通い始めたのですが、本科生の頃に体験した漆工制作の課題から工芸に興味を持ち、工芸科を志望しました。元々専科生の頃は美術科志望だったので、自分の人生にとって大きな分岐点となった授業でした。

のものについて考えさせられるような、深く幅広い視点からの指導を受けることができました。もちろん悩むこともたくさんありましたが、そのお陰で大きく成長できたと思っています。

京都市立芸術大学では1回生の後期にある工芸基礎実技にて、染織、漆、陶磁器の課題をそれぞれ受けた後、2回生からの専攻を自分で決めることができます。どの素材も魅力的でとても悩みましたが、土の可塑性からできる自由な造形と、焼き物のもつ多彩な表情に強く惹かれ、陶磁器を専攻しました。陶磁器専攻での授業では、自分が素材を扱う中で感じたこと、気づいたこと、焼き物で表現するという本質そ

そして自分が考える焼き物の魅力や新たな表現について、もっと深くじっくり研究したいと思い、大学院に進みました。大学院では「絵画と焼き物」という自分の好きなこと2つを組み合わせたとような表現を研究テーマにしていました。そして大学院を修了した今でも、表現を模索しながら陶芸作家として制作を続けています。京都市立芸術大学の陶磁器専攻は、既存の焼き物やそのあり方にとらわれず、焼き物の本質と向き合い考える場として、とても充実していました。芸大を志す皆さんにも、ぜひ自分なりの考え方や表現を見つけて頑張っていってほしいです。応援しています！



1. 修了制作 ただここにある風景
2. 修了制作 ただここにある風景「山のような」
3. 修士2回生 前期制作 さざ波のディナープレート
4. 修士1回生 後期制作 習作 器に落書き